

日本中國學會報 第72集 抜刷
2020年10月10日 発行

学界展望 (語学)

秋谷	裕幸
橋本	貴子
野原	将揮
戸内	俊介
石崎	博志
加納	希美
濱田	武志
鈴木	慶夏

学 界 展 望

この項を編集すべき2020年春、突如新型コロナウイルスによる感染の危機に世界中がみまわれた。大学など日本の研究教育機関では入学式の中止を皮切りに、学生や教職員の自宅待機など、4月以降、多くの予期せぬ事態に対応が急がれた。また、これに伴う図書館の閉鎖も相継ぎ、今回、この学界展望を執筆することが困難となった。幸い語学部門については担当者各氏の努力により、この通り掲載が実現したが、哲学と文学については、次号第73集に2年分をまとめて掲載することとする。

●語 学

はじめに

学界展望（語学）は、今回より日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。令和2年度から新設された本委員会は、昨年度までの学界展望ワーキンググループが発展的に改組されたものである。

これまでと同様、本稿は原則として2019年1月から12月までに日本国内で公開された著書および学術論文を対象とするともに、重要な研究成果については海外で公開されたものも取り上げる。

研究分野の分類は昨年と同様であり、「はじめに」、「音韻」、「文字・訓詁」、「文法・語彙（上中古）」、「文法・語彙（近代）」、「文法・語彙（現代）」、「方言」、「教育」となっている。執筆者は、項目順に、秋谷裕幸（愛媛大学）、橋本貴子（神戸市外国語大学）、野原将揮（成蹊大学）、戸内俊介（二松学舎大学）、石崎博志（佛教大学）、加納希美（金沢大学）、濱田武志（三重大学）、鈴木慶夏（神奈川大学）である。はじめに、音韻、文法語彙（現代）、方言については執筆者が昨年度から交代した。全体の調整は秋谷が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも2019年に出版されたものである。

- | | |
|-----------|--|
| 『东部』 | 『东部亚洲地理语言学论文集（ <i>Collected Papers on Eastern Asian Geolinguistics</i> ）』（アジア・アフリカ言語文化研究所） |
| 『東京』 | 『東京大学中国語中国文学研究室紀要』22号 |
| 『東洋』 | 『東洋文化研究所紀要』第174冊 |
| 『開』 | 中国語学研究『開篇』vol.37（好文出版） |
| 『世』2、『世』4 | 『世界汉语教学』2019年第2期、第4期（北京语言大学） |
| 『中』 | 『中国語学』266号（日本中国語学会） |
| 『集刊』 | 『中國語言學集刊（ <i>Bulletin of Chinese Linguistics</i> ）』Volume12 Issue1（Brill） |
| 『現代』 | 『現代中国語研究』第21期 |

『中教』 『中国語教育』第17号（中国語教育学会）
Papers *Papers from the Workshop “Phylogeny, Dispersion, and Contact of
East and Southeast Asian Languages and Human Groups”*
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

なお、本稿執筆期間が新型コロナウイルスへの対応期間と重なったため、例年通りの文献収集が行いがたい状況下での執筆を担当者は余儀なくされた。万全を期したつもりではあるものの、必要な場合には次集において追補を行いたい。（秋谷裕幸）

一、音韻

まず中国語学研究『開篇』に言及したい。1985年以来34年もの間、国内外の中国語史および中国語方言関係の論文を中心に掲載してきた国際的な研究誌であるが、編集長・古屋昭弘氏の退職にともない、2019年に惜しまれながら閉刊となった。最終号かつ鄭張尚芳、楊耐思両氏の追悼記念号となったvol.37には、音韻史および方言音韻の論文が実に10数本掲載されており、当該分野の研究を志す者としては感慨深いものがあった。

上古音についてはまず、秋谷裕幸・野原将揮「上古唇化元音假说与闽语」（『中国語文』2019年第1期）および野原将揮「構擬“泉”字音—兼論“同義換讀”」（『集刊』）を挙げる。前者は円唇母音仮説を閩語の音韻データによって支持するとともに、閩語の最も早期の層が紀元前3世紀にまで遡ることを示す。後者は、中古音でu介音を持ち、上古音では円唇母音oを主母音として想定される“泉”が、非円唇aを主母音としていたことを考証し、-anから-onへの変化を「同義換讀」（ある語を意味が同じかまたは類似する別の語の発音により読み替えること）によるものと説明する。次に吉池孝一・中村雅之「烏弋山離とアレクサンドリア（1）～（4）」および「漢語上古音の-r介音（1）～（3）」（『KOTONOHA』194、195、197、200、201、203、204）を取り上げる。前者はAlexandriaの音訳とされる「烏弋山離」を端緒として、対音資料や南方方言音を用いて漢代の音価について考察する。前漢と後漢の音価の違いを時代差でなく地域差によるものとする点に独自性が見られる。後者はシナ・チベット祖語再構を視野に入れた近年の上古音研究の議論を批判的に検討する。

中古音では、太田斎「『玄應音義』反切と『切韻』反切—中古效攝所屬字の分析」（『日本中国学会報』71）を挙げる。玄応「一切経音義」が『玉篇』反切のみならず『切韻』の反切をも書名を挙げずに引用していることを指摘し、更に玄応が『韻集』を引用した可能性についても検討を加える。なお玄応の『玉篇』利用については太田斎「玄応音義に見る玉篇の利用」（1998年）を参照のこと。橋本貴子「対音資料から見た初唐期の匣母の音価について—義浄の音訳漢字を中心に—」（『開』）は梵漢対音と漢訳マニ教文献の音訳讃歌とを用いて初唐期の匣母が有声性を保っていたことを示す。

近世音では、対音資料に関する丹念な研究として、更科慎一「『華夷訳語』の音訳法の諸問題—『女真館訳語』を中心に」（『山口大学文学会志』69）、鋤田智彦「『御製増訂清文鑑』における漢字音」（『開』）、濱田武志「論『蒙古字韻』所反映的漢語方言音系」

(『集刊』)を挙げる。更科論文は『華夷訳語』乙種本と丙種本の「雑字」部分の音訳漢字について、両者の間に時代的差異、方言的差異、文体的差異に加えて、音訳手法の差異が存在することを『女真館訳語』を例に論じる。欧文資料では、吉川雅之「ある中露字典の漢字音について」(『東洋』)、田野村忠温「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記：流音の知覚と表記」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』59)がある。吉川論文はライデン大学図書館所蔵の中露字典(抄本)について初めて調査報告を行うとともに、この資料中にキリル文字で記された漢字音を推定し、そこに19世紀中期の北京音と共通する特徴が見られることを指摘する。

方言音韻では、秋谷裕幸「原始閩北區方言裡的 *ə」(*Language and Linguistics* 20-3)がJerry Normanおよび孫順両氏による閩北方言祖語に対する修正案として、主母音 *ə 系列の韻母(*ə, *iə, *əu, *əŋ, *iəŋ)を提案し、それらを含む44の韻母からなる韻母体系を再構している。閩北方言祖語の単母音韻母 *ə が上古音の *ə とよく対応する点が注目される。進行中の音韻変化を調査したものとして、大西博子「江蘇通州方言における入声舒声化—金沙と二甲の比較分析—」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』10-1)、西田文信「現代香港粵語における上声の変異について—同一話者の経年調査の結果から—」(『開』)がある。西田論文については「六、方言」の項を参照。(橋本貴子)

二、文字・訓詁

『漢字學研究』第7号は「金文通解」に加え、「字説」として大形徹「醫について」を掲載する。このほか翻訳として、村上幸造「甲骨文法—陳夢家『殷虛卜辭綜術』第三章文法(上)一」、訳注に笠原直樹「子彈庫「楚帛書」十三行文釋注」がある。「古文字學研究文獻提要」は甲骨文に関する裘錫圭氏の論考をまとめており、特に注目される。

『中國出土資料研究』(中国出土資料学会)第23号に掲載の李筱婷「馬王堆漢墓帛書『春秋事語』用字研究」は馬王堆帛書『春秋事語』に見える用字法を整理したものである。当該論文は『春秋事語』と齊系資料の用字習慣に関連性があるとし、さらにそれを根拠として『春秋事語』のテキストが齊に由来するという可能性を示唆する。史傑鵬「利用詞源分析破解《楚辭》和《史記》中的兩個疑難問題」は楚辭や史記に見える諸問題について訓詁学的手法を駆使してアプローチしており、興味を掻き立てられる。このほか同誌は、曹方向「上博簡『靈王遂申』再研究」、「嶽麓書院秦簡」の釋文・編聯を整理したものとして陶安「嶽麓書院秦簡《爲獄等狀四種》第三類、第四類卷冊釋文、注釋及編聯商榷」も掲載しており、充実した内容となっている。

文法に関わるものとしては、雷塘洵「古汉语动词“假”“借”的音义、句法及其演变」(『中』)、宮島和也「淺談《逸周書·皇門》“開告于予嘉德之說”以及相關問題」(『東京』)がある。また否定詞に関して戸内俊介氏が精力的な研究を展開している。これらについては、「三、文法・語彙(上中古)」の項を参照。否定詞については、神戸市外国語大学で開催された国際中国語言学会(IACL)においてワークショップ(The Diversity of Sino-Tibetan Negation Phenomena)が企画され、古漢語に関して宮島和

也氏が「**试论上古汉语否定词的多样性及其体系**」を報告した。近年、古漢語分野では否定詞関連の研究が活況を呈しており、否定詞が甲骨文から西周、そして春秋戦国、秦漢にかけてどのように変遷していくのか、今後の研究に期待したい。

大西克也「**雅言獻疑**」（『東京』）は「雅言」という語が「官話」や「標準語」を表すようになった背景を詳らかにする。「雅言」という語は春秋戦国時代の共通語、すなわち *lingua franca* の存在を容易に想起させるが、当該論文は「雅言＝共通語」という図式に疑義を呈し、「雅言」が真に意味するところは未だ謎のままであると結論づける。

陳少明（張瀛子訳）「**訓詁に因って義理に通ず—戴震、章太炎などを手がかりに清代漢学の哲学方法を論じる—**」（『中国—社会と文化』第34号）は副題にもあるとおり清朝における哲学的議論を論じることに主軸が置かれたものであるが、戴震らの訓詁学的手法を仔細に論じており、歴史言語学の立場からも大いに参考になる。

このほか漢字そのものを対象としたものではないが、吉川雅之「**ある中露字典の漢字音について**」（『東洋』）、濱田武史「**論《蒙古字韻》所反映的漢語方言音系**」（『集刊』）があり、前者はキリル文字、後者はパスパ文字からなる対音資料を研究対象としたものである。前者については「一、音韻」を参照。

漢文に関する書として、宮本徹・松江崇『**漢文の読み方—原典読解の基礎—**』（放送大学教育振興会）が出版された。前半部分には豊富な用例と解説が付されており、辞書のように用いることもできるため重宝されるだろう。

なお諸般の事情により、『中国研究集刊』李号（第65号、大阪大学中国学会）を手にとることができなかったが、目次を見る限り今号も充実しているようである。

（野原将揮）

三、文法・語彙（上中古）

まず単刊本から繙読する。宮本徹・松江崇『**漢文の読み方—原典読解の基礎—**』（放送大学教育振興会）は、上中古中国語の文法規則を解説した上で、代表的な文献の訳注を掲載し、さらに日本での漢文の受容をも取り上げた、漢文の総合的概説書である。概説書と雖も、その文法解説は訓読方法などのテクニカルな説明に留まらず、個々の機能語や構文を詳説する。特に疑問詞や目的語前置構文、数量表現の項目は従来のテキスト類を遥かに超える充実ぶりである。

次に論文に移る。戸内俊介「**再び甲骨文の「不」と「弗」について—使役との関わりから—**」（池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』、京都大学人文科学研究所）は同氏の「**甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異**」（2018年）の結論を一部修正したもので、甲骨文の動詞句の語彙的アスペクトを手掛かりに、「弗」を動詞句の表す事象の展開がその内在的終結点に至らないことを示す否定詞であると位置づける。戸内俊介「**再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”的語義功能區別—兼論甲骨文中的非賓格動詞**」（『文字・文獻・文明』、上海古籍出版社）は上記2論文を合わせたダイジェスト版である。なお、甲骨文の否定詞の機能が春秋戦国以降のそれと異なることは広く知られているが、前者の「弗」が後者の「弗」（＝「不＋

之」の合音) とどのように繋がるかはなお未解決の問題であり、今後の展開が待たれる。

宮島和也「淺談《逸周書・皇門》“開告于予嘉德之說”以及相關問題」(『東京』)は、『逸周書』皇門篇「開告于予嘉德之說」の「于」を言説内容をマークする成分と見なした上で、清華簡『皇門』の対応箇所「維莫余嘉德之說」についても検討を加える。本論文は出土文献と伝世文献をバランスよく用いつつ、上古の特殊な文法現象を文法化の類型論的パターンに当てはめることで無理なく解釈しており、説得力に富む。

大西克也「論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能」(『歷史語言學研究』13)は、上古後期の指示代名詞「之」と「其」の指示機能を代示と理解した上で、文中或いは話し手の頭の中にある先行詞を照応することを通して中心語に属性を付与することがその基本的機能であることを示しつつ、従来から議論のあった、先行詞のない例、「之、其」が二人称を指示する例、「しかるべき」を表す例、「其」の定冠詞的用法などが、いずれもこの基本機能を軸に解釈可能であることを論ずる。

雷塘洵「古汉语动词“假”“借”的音义、句法及其演变」(『中』)は、貸借関係を表す「借」と「假」が「与奪不明」—「借りる」と「貸す」双方の意味を表す—になる過程を、文法と語音の両面から通時的に追究したものである。本論文は語彙研究のみならず、上古の形態論、四声別義、二重目的語文の研究にとっても高い参照価値を有する。

高柳浩平「中古早期の「使」構文について」(『人文研紀要』92)は上中古間の「使」が内容語的な派遣義・命令義から機能語的な使動義へと変化する過程を文法化理論に沿う形で描きつつ、中古以降、直接使役を表す「使役者+使/令+非指示的名詞 or Ø + V2」において被使役者が「使/令」とV2の間に具体的に表出しないのは、原因事象と結果事象が概念的に近接している直接使役に対応して、それらの言語形式上の距離が縮約された、謂わば結合の類像性(iconicity)に起因すると推定する。使役については多くの研究の蓄積があるが、類像性という観点からその文法化を捉えなおした点は注目に値する。

楊安娜「早期漢譯佛典中的處所詞考察—以“所”、“處”為中心」(『饕餮』27)は、三国南北朝期の初期漢訳仏典に見える「X所」「X處」の前接成分Xの性質や、両者の統語分布の違いを仔細に調査した上で、「所」は実質的意味が弱化した粘着成分である一方、「處」は実質的意味が強い成分であったと述べる。類義語の研究は、基礎資料に対する丁寧な分析が必須であるが、本論考はそれを体現していると言える。

次の2本は、疑問文を〈疑念〉と〈問いかけ〉の2種に分割しつつ立論する。松江崇「汉语疑问数词“多少”的生产机制—兼谈中古疑问数词系统的复杂性」(『中国语言文学研究』25)は、「多少」は元来、数量の多寡を表す語で、後漢魏晋南北朝期では〈疑念〉のみを示し、〈問いかけ〉の機能は弱かったが、それが疑惑や疑問の語気を帯びたコンテクストに頻出したことで、コンテクストの含意を取り込み、唐宋以降、〈問いかけ〉を表すようにもなったと推定する。山田大輔「中古漢語に見える“將+否定詞”の機能及びその成立過程に関する一考察」(『饕餮』27)は、一語化した「將+否定詞(不、非、無)」形式が、しばしば独言や内心発話に見えることを手掛かりに、その機能を〈疑念〉を表すものと位置付ける。さらにこの形式は仏典の翻訳によって成立したも

のであり、〈疑念〉の意味は、「将」の〈直前相〉というアスペクツ的意味から派生したものであると推測する。この2つの論考は、研究対象は異なるものの、疑問文に対するその共通した捉え方は、他の言語現象を扱う際にも示唆に富む。

なお、2019年は新元号「令和」が発表されたことで、その出典である『万葉集』が踏まえた張衡「帰田賦」が俄かに注目を浴び、関連する論説がいくつも発表された。ここでは、齋藤希史「「令和」をめぐる考察①」（東京大学新聞オンライン、4月30日）を挙げておく。（戸内俊介）

四、文法・語彙（近代）

ここでは宋代から民国期の文法・語彙に関する研究を対象とし、以下「白話資料」・「満漢資料」・「域外資料」に分類して概観する。

白話資料は2本の論文を挙げる。木津祐子「「箇」の個別化機能と定指“量名”構造」（『開』）は、「箇（个）」が後続名詞を個別化して文脈が要求する属性に焦点を当てる機能を分析し、『朱子語類』や『祖堂集』の用例から、「箇」が量詞機能より先に定指指示用法を補強する機能をもっていたことを指摘する。そのうえで安徽、貴州、湖南、蘇州など現代諸方言の用例を援用し、数詞“一”を持たない定指指示用法は、数詞“一”が省略された用法ではない可能性を指摘する。また刘晓晴「语气助词“就是（了）”的词汇语法化途径」（『中国語研究』61）は、現代中国語の文末助詞“就是（了）”が語彙文法化したプロセスを考察する。文末の“就是”と“就是了”は明代中期に増加し、明末清初に語彙化と文法化を経てVP + 就是（了）の動詞用法と、S + 就是（了）の語気助詞の用法を獲得したとする。とりわけ“就是了”は副詞“就”と形容詞の変種“是了”の結合から成立したと結論づける。

満漢資料は竹越孝により英国所蔵の満漢対訳資料の校注が2本公開されている。『問答語 fonjin jabun leolen i bithe』（1827年、大英図書館（BL）蔵）に対する「校注『問答語』（『神戸外大論叢』70-2）と『満漢合璧集要 manju nikan hergen in kamciha isabuha oyonggo bithe』（1764年、東洋アフリカ研究学院（SOAS）蔵）に対する「校注『満漢合璧集要』（上）（下）」（『神戸外大論叢』71-1）である。また Takashi Takekoshi, Grammatical Descriptions in Manchu Grammar Books from the Qing Dynasty (*Histoire Epistémologie Langage* 41-1) は、漢語の分析とは対照的に、清代の漢人による満州語の文法分析には近代的文法概念が適用されていたと指摘する。

次に中国以外で編纂・利用された資料を「域外資料」とし、「唐語・日本資料」・「泰西資料・訳語」の順に解説する。奥村佳代子『近世東アジアにおける口語中国語文の研究：中国・朝鮮・日本』（関西大学出版部）は、18、19世紀の中国語の口語と白話の境界を明らかにすべく、中国、朝鮮、日本で「話し言葉」として記述された漢語を分析する。とりわけ中国と欧州所蔵のキリスト教檔案と、朝鮮への中国漂着船の尋問記録を取り上げ、両者の相違を考察した点が特筆される。

泰西資料では、内田慶市『『拜客訓示』の研究』（関西大学出版部）が上梓されている。これは『拜客問答』、『拜客訓示』、Paul PERNY の Dialogues Chinois-Latins (1872)

の解題・影印・翻刻を掲載するが、パリのフランス国立図書館（BNF）、ヴァチカンのヴァチカン図書館（BV）、ローマのイエズス会ローマ総本部アーカイブズ（ARSI）、トレドのトレド・イエズス会歴史文書館（APHTCJ）など欧州各地に所蔵された一連の写本・刊本の分析を基礎とする。上掲三書の継承関係から、イエズス会の著作が宗派對立を超えてドミニコ会やプロテスタント系宣教師にも受け継がれたことを指摘する。

愛知大学の雑誌『日中語彙研究』8では英国人中国学者サマーズ（James Summers, 1821-91）の特集が組まれている。サマーズは西洋人による漢語教科書を詳細に検討して *A Handbook of the Chinese Language*（1863）を書き上げ、欧人による漢語教育の到達点の一つと位置づけられる。特集では伊伏啓子氏が名詞、朱鳳氏が六書（漢字）、奥村佳代子氏が代名詞と人物呼称、千葉謙悟氏がムードとテンス（動詞）、塩山正純氏が副詞を分析している。また伊伏啓子「近代欧文資料にみられる“一個”について」（『北陸大学紀要』46）は、19世紀の欧人による著作に中国語の量詞が計数機能や類別機能のみならず、個体化機能をも有するという認識が反映されていたと論じる。また服部隆「十九世紀の文法研究：オランダ語・日本語の品詞分類に与えた漢語学の影響」（『国語と国文学』96-5）は、19世紀の蘭語・日本語文典の品詞分類に漢語学の分類観が反映し、明治以降の文法研究にも影響を及ぼしたと指摘する。

「訳語」分野における最大の収穫は陳力衛『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に』（三省堂）である。本書は日本の近世における漢学の流行から、新漢語の創出と拡大、新中国成立以降の現代中国語への影響まで、近代に成立した新たな概念が東アジアで双方向的に展開していく様子を実証するとともに、日中英の資料に基づき東アジア全体の語彙交流を俯瞰的に論じている。また沈国威「Evolution 如何译为“天演”？」（『関西大学東西学術研究所紀要』52）は、嚴復が Evolution を“天演”と訳した要因を考察し、cosmic process の訳語“天演”がのちに evolution に借用されたと指摘する。

（石崎博志）

五、文法・語彙（現代）

本分野においては、既に一定の結論をみている問題を、認知言語学、対照研究等の隣接領域の枠組みの中で問い直す試みにおいて、各領域の発展に資する顕著な成果が報告された。

日中対照研究では、井上優「中国語のとりたて表現」（野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版）がある。意味、統語的位置（語順）、運用面等の各側面から、中国語と日本語におけるとりたて表現の特徴を対照的に論じたものである。一連の分析を通じて中国語の言語的特徴が改めて確認されると共に、とりたて表現の多様性と普遍性を言語横断的に捉える上での有益な知見が提供されている。

「とりたて」の現象を扱う論考には、この他に池田晋「A 就 A 在 X」结构的焦点特征」（『現代』）がある。単音節の属性形容詞（A）を用いる“A 就 A 在 X”と“A 在 X”の比較により、両構造における X の焦点的特徴の差異を論じるものである。“A 就 A 在 X”は、“卓立焦点（とりたて）”の手法を通じて X を焦点化し、これにより発話

者の主観的な評価（属性 A の内的要因としては、X の重要性が候補として想定される同類の成員の中で最も高い）を表す形式である、とする見解を示しながら、“A 在 X”との相違の核心はこの種の焦点的特徴の有無に認められるとする、独自の説を提示している。

また、前田真砂美「“比”構文における〈A + V〉と数量句」（『現代』）は二つの〈A + V〉の形式（“多 + V”及び“早 + V”）を取り上げ、“**我比他早起了十分钟**”のように、“比”構文において〈A + V〉と共起する数量句の機能を考察するものである。当該構文中の数量句は、その具体的数量によって二者間の差を明示することで、程度性の表現としての再分析を促し、これにより、〈A + V〉のもつ「デキゴト性」をキャンセルし、程度や差のあり方を表現しようとする“比”構文の要求を満たす。当該の議論では、“比”構文中の数量詞の機能はこのような再分析のメカニズムを通じて、当該構文への〈A + V〉の適合性を高めることにありと結論される。

森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』（くろしお出版）には、他の言語に関する論考と共に、中国語の現象を扱う論文が多数収録された。広く認知言語学の領域において中国語に関する研究成果が問われることにより、双方の学術領域における議論の活性化と理論的発展が期待される。紙幅の都合上、以下に2篇のみ取り上げる。三宅登之「行為の評価からモノの属性へのプロファイル・シフトについて」は、本来行為に対する評価を述べる“容易”“難”等の形容詞が、モノを修飾したり、それについて叙述したりする用法を併せ持つ現象をプロファイル・シフトの例として扱い、行為に対する同一の評価をする人が多く評価が恒常的であることが、この現象の基盤となっている、とする見解を示している。また李菲「中国語の攻撃構文における臨時動量詞の意味機能」は、先行研究において指摘された借用動量詞の適用条件を、構文論的観点から捉え直すことにより、借用動量詞の適用動機について、より核心に迫る修正案を提示している。

語彙研究の分野では、牛彬「基于口语语料的“拜托”新用法分析」（『日中語彙研究』8）が、現代中国語の口語コーパスに観察される“拜托”の新用法を論じている。「聞き手の観点や何らかの事柄に対する話し手の否定的態度を表す」とされる“拜托”の用法において、その動詞性が消失し、新たに修飾副詞としての機能を獲得したことを、統語機能や伝達機能等の観点から考察している。また、その成立要因についてはイギリスの言語学者ジェフリー・リーチ（Geoffrey Neil Leech, 1936～2014）が提唱するポライトネスの原理（Politeness Principle）との関連が認められると指摘している。

（加納希美）

六、方言

まず、近代の文献資料に基づく研究を紹介する。『中国語学』266号にて、口語（粵語、客家語、官話、日本語）を反映した欧文資料の研究が特集された。吉川雅之「西文資料與粵語研究」（『中』）は近代粵語（早期粵語）の通時的变化や多様性の研究方法を論ずるほか、新発見の18世紀半ばの粵語資料を紹介する。柯理思（クリスティーン・

ラマール)「西文資料與客家語研究」(『中』)は宣教会の客家語文献や同資料を用いた客家語の研究成果を紹介し、資料との比較を通じて客家語訳聖書の言語資料としての価値を論ずる。千葉謙悟「西文資料與官話研究」(『中』)は明末以降の欧文資料を比較し、資料中における「官話」の多義性、および意味・用法の変遷について論ずる。吉川雅之「ある中露字典の漢字音について」(『東洋』)については「一、音韻」を参照。林素娥「一百多年来吴语“没有(无)”类否定词的类型及演变」(『開』)は、この百数十年間に上海方言などで起きた「没有(无)」が「勿曾」を代替する現象について、今も未発生の方言(金華方言など)と、百数十年前に既に発生している方言(寧波方言)が呉語に見られることを指摘し、馬之涛「关于19世纪宁波方言牙喉音顎化及尖团合流的问题」(『開』)は、寧波方言における牙喉音の口蓋化や尖端合流、およびこの音変化と関連して発生した韻母の chain shift の進行過程について考察する。遠藤雅裕「論臺灣海陸客語“再次”義「過」的語法化」(『開』)は欧文資料や和文資料を用いて、海陸客語(客家語海陸片)の「過」の副詞用法「ふたたび」が、「再・過」の連用に起源を持つという新たな仮説を提示する。復刻資料としては、『日本統治下における台湾語・客家語・蕃語資料』シリーズ(第1巻『台湾語法』(中川仁解説)、第2巻『語苑』にみる客家語研究)(羅濟立解説)、第3巻『蕃語研究』(中川仁・王麒銘解説)が近現代資料刊行会より刊行された。

言語地理学的研究については数多くの成果が、『*Collected Papers on Eastern Asian Geolinguistics*』、および国際中国語言学学会第27回年会プレワークショップの成果に基づく *Papers from the Workshop “Phylogeny, Dispersion, and Contact of East and Southeast Asian Languages and Human Groups”* の2論文集にて発表された。例えば遠藤光暁「汉语及周边语言中“南瓜”和“马”两个借词的地理分布」(『东部』)は、借用時期が大きく異なる南瓜と馬の語形変化のメカニズムや伝播の過程を対比的に考察する。黄河・吴雅寅「参考行政层级观察方言特征的扩散方式」(『东部』)は葉祥苓『蘇州方言地图集』(1981年)所載の方言地図のうち Cascade model (級联模型。地理的に隔絶した地点間の伝播モデル)を体現する27枚をもとに、都市化の進捗と“行政扩散模型”の成立との相関関係を立証したうえで、類似度行列で地点間の類似度を計量的に分析する方法を提唱する。鈴木史己「Characteristics of the Geographical Distribution of Words Denoting Cultural Items in Sinitic Languages」(*Papers*)は鉄、稲、高粱、トウモロコシの語形分布のパターンの相違が、気候的差異や語彙の進入時期、他の語との関係などによって条件づけられていることを実証する。このほか、八木堅二「山西方言における軽声と語末変調」(『中』)は山西方言の軽声が南北でそれぞれ独自に発達した蓋然性が高いと推定したうえで、軽声が語末変調の中和の結果生まれ、軽声を持つ方言の分布域が山西省の周辺から中央へと拡大している可能性を述べる。遠藤光暁「山東方言二字組変調の地理言語学的研究」(『経済研究』11)は山東方言について、調類の組み合わせごとに作成した言語地図の対照、そして過去の音韻資料との比較等から、各変調の発生順序や発生原因、および変調現象の拡散過程の解明を試みる。数理的性格が強い研究として、岩田礼・植屋高史「Lexical Innovation and Inter-Dialectal

Distance in Chinese」(Papers) は全 88 語に対して語彙変化の進度を 0～3 の実数値で定義して、各語の進度の平均値を全 42 方言について算出し、南方方言の保守性と官話の周辺的変種の改新性を指摘する。

言語接触に関する研究として、川澄哲也「漢語甘溝方言の形成過程再考」(『言語文化研究』38-2) は、青海省海東市民和回族土族自治県の甘溝方言に、モンゴル系言語の他、チベット語からの影響が見出されると述べる。佐藤直昭「上海人の「普通話」に対する言語意識」(『開』) は地方普通話の一種である上海普通話に対する上海人の態度や容認性判断を、アンケート調査を通じて社会言語学的に考察する。

このほか、秋谷裕幸「**闽东区方言的 {手指} 义词及其相关的词语**」(『開』) は閩東区の諸方言における指・親指・小指・(手の) 爪の閩東祖語の祖形を再建し、語幹の本字を「指」と同定するとともに、祖語から各方言への音変化や語形の発達過程を復元する。邵兰珠「**广东吴川吉兆村双语人粤方言同音字汇**」(『開』) は、広東省吳川市吉兆村の粵語・黎語の二言語話者が話す粵語の報告であり、張勇生・汪玲・张文娟・彭爱华「**东乡县马圩镇方言同音字汇**」(『開』) は江西省撫州市東郷県の贛語の報告である。両地域とも多言語・多方言の雑居地であり、記述的研究の成果発表の意義は大きい。西田文信「現代香港粵語における上声の変異について」(『開』) は、1993 年と 2018 年に採録した同一の話者 4 名の音調を比較し、近年の広東語に見られる陰上・陽上合流現象を実証する。飯田真紀『**広東語文末助詞の言語横断的研究**』(ひつじ書房) は、広東語の文末助詞の網羅的記述を行ったうえで、音韻的・形態統語的観点から文末助詞の分類体系を構築し、そのカテゴリが必ずしも意味的特徴と一対一対応を示すとは限らないことを指摘する。さらに同書は、伝達態度を表示する義務度が高いという特徴を広東語や日本語が共有することを指摘し、文末助詞という語類の存在が東アジア・東南アジアに特有の言語的特徴である可能性に言及するなど、示唆に富む言語横断的展望を示す。濱田武志『**中国方言系統論**』(東京大学出版会) は粵語と桂南平話の共通祖語「**粵祖語**」を再建し、各地の変種の系統関係を分岐学的方法で推定するとともに、共通祖語の情報の一部を系統樹から導き出す方法についても論ずる。(濱田武志)

七、教育

2019 年は、教授法や指導法を再考・追究しようとする実践的な研究が目立った。

『中国語教育』第 17 号での「身近な言語をもっと知ろう—〇〇語は 90 分でここまでできる—」は、ドイツ語・スペイン語・ロシア語・フランス語・韓国語・日本手話をゼロから始め、初回授業の 90 分後にコミュニカティブな成果をあげる極小スパンの学習設計を、ふだん中国語教育に従事する者が体験したワークショップの特集である。90 分で到達すべき能力の目標とその目標に対応する教育的タスクとともに、課題の遂行能力を身につけたことを客観的に評価できるルーブリックを明示する。

小川典子「日本語を母語とする中国語学習者の L2 読解における付随的語彙学習—10 名の学習者のケーススタディー—」(『中教』) では、思考発話法 (think aloud) によるプロトコル分析を運用して、読解における付随的語彙学習 (incidental vocabulary

learning) の連鎖を観察し、日本語母語話者が漢字を活かした知識源を多用している点について利益と不利益の双方を論じる。李佳「日本初級汉语教材中の典型动宾搭配考察—从在日汉语教学视角出发—」(『中教』)は、日本で出版された初級教科書で提示される「動詞+目的語」によるコロケーションを調査し、テキストに母語話者の使用実態が必ずしも反映されていないこと、新出単語を母語話者がよく使うコロケーションの形で提示する頻度が低いこと等を、具体例とともに示す。黄勇「框式介词“从……起/开始”中的隐现规律试探」(『中教』)は、“从……起/开始”での“从”または“起/开始”が省略される規則性を統語論、意味論、語用論の面から記述し、“*从四月学习汉语”とする誤用から前置詞“从”は“起/开始”とともに教授すべきだという先行研究の主張に対し、“从”が省略された実例を挙げながら、むしろ後続成分“起/开始”に比重をかけた導入方法も検討してよいのではと述べる。

次の実践報告は、中国語教育、ひいては外国語教育の存在意義について、学習者自身が他者との相互交流や社会との関わりを意識する過程を考察する。島村典子「基于大学生中文能力差异的小组合作学习策略与实践」(『中教』)では、経済開発協力機構(OECD)が2018年に発表した「新たな価値を創造する力」「緊張やジレンマを解決する力」「責任をもつ力」を身につけるには、他人と協同する力と個人の責任能力の涵養が必要だと論じる。胡玉华「关于“能动学习”效果的实践研究—以汉语初级班的教学活动为例」(『中教』)は、学習者の多くが「自分で調べて発表する演習形式の授業」より「教員が知識・技術を教える講義形式の授業」を希望しているという、アクティブ・ラーニングに対する教員側の高い期待と学生側の低い評価との間にあるギャップについての論考である。

ところで、第二言語としての中国語に関する言語習得過程・言語処理過程の認知的基盤を探究する認知心理学的研究は、非常に重要な研究分野でありながら国内では現在進行中のものがわずかに存在するだけで、今のところ研究成果がほとんどない。そこで、この研究上の空白部を補填するものとして、海外の研究者たちによるものであるが、以下3篇の共同研究に言及したい。靳洪刚等3名による「事件相关电位(ERP)技术在第二语言句法习得研究中的应用」(『世』4)は、言語刺激に対応する脳の反応として脳電位(Electroencephalogram: EEG)を分析するもので、事象関連電位(Event-Related Potentials: ERP)の測定によって被験者の言語処理と言語習得の過程を追究する。陈路遥等6名による「基于词类信息的语标标示对汉语二语句法规则建构的影响研究」(『世』2)は、注音字母による視覚的人工文法学習(artificial grammar learning)を利用した実験の結果、品詞情報を与えられたグループと与えられなかったグループとでは、前者のほうが複雑な統語規則の構成に有利であり、その有利性は統語構造の複雑性が増すほど顕著になることを論じ、第二言語の処理過程における品詞情報のラベル表示能力が有する重要性の直接証拠を示したと述べる。何美芳等3名による「不同语言类型的二语学习者汉语动结式加工的眼动研究」(『世』2)では、“动结式”を動詞の語義から形容詞の語義を推測し得る“弱动结式”(例：“张三擦干净了桌子”)と推測し得ない“强动结式”(例：“张三哭湿了手绢”)とに二分し、“弱动结式”が言語類型論上の無標形式で

あることを指摘したうえで、眼球運動計測による注視時間や注視頻度等进行分析した結果、中国語母語話者には“**强动结式**”が“**弱动结式**”の処理より難度は高いが、中国語学習者には、“**强动结式**”が“**弱动结式**”の処理より難しいとは限らず、場合によっては“**弱动结式**”のほうが難しい点が指摘され、さらに、中国語学習者の第一言語に“**强动结式**”が存在するか否かによって、とくに“**弱动结式**”の処理難度に相違が生じることを指摘する。

(鈴木慶夏)